

講演1 「アレルギーのおはなし」



国立成育医療研究センター アレルギー科医長

大矢 幸弘 先生

喘息と診断される子どもたちは
30年以上前から増加

平成の時代に入ってから
10年ごとに倍増してきた

でも本当に10年で倍増したのか

- ある病院にいったら気管支炎と言われたが、なかなか治らないので別の病院を受診、喘息と言われた。でも薬は同じだった、これって何？
- ぜいぜいする病気が全て喘息とは限らない
- 喘息という診断をつけることに非常に慎重な医師が昔はいたのだが……

本当に増えたかどうかは、同じ基準で調べないとわからない

- エコチルでは、国際的に用いられている質問票を使って、調べます
- 回答者に症状を尋ねる同じ質問票を使えば、本当に増えているかどうかわかります
- 全国の別の地域と較べることもできます
- 外国の子どもたちと較べることもできます

なぜ 先進国で喘息が増えたのか

- その理由はまだ明らかではない
- 喘息だけでなく、アトピー性皮膚炎やアレルギー性鼻炎（花粉症）なども増えている
- 先進国や新興国で増加が認められることから現代文明の進化と何らかの関連がありそう
- 高度成長期には工場から排出される亜硫酸ガスなどの大気汚染、規制が進んだ最近の先進国ではディーゼルエンジンを積んだ自動車の排気ガスによる大気汚染が問題視されている

大気汚染の影響を受けやすいひとと そうでないひとがいるらしい

- オゾンやディーゼル粒子などの大気汚染濃度が低ければレドックス反応による生体防御能が働き、事なきを得る
- 生体防御能を担っている酵素(NQO1、GSTM1など)の遺伝子多型*が大気汚染の影響の受けやすさと関係がある

*人口の1%以上に存在するありふれた遺伝子配列のパターンの違い

喘息の発症や増悪には大気汚染や遺伝子の多型パターンが影響している

しかし、単純な親からの遺伝のメカニズムだけではこの40年間で激増した理由を説明できない

遺伝子の働きそのものが大気汚染やたばこななどの環境化学物質の影響を受ける

乳幼児アトピー性皮膚炎の患者は食物アレルギーの合併率が高い

では、妊娠中と授乳中からの食物抗原の除去に効果があるのか？

→ 水準1のエビデンスはコクランシステマティックレビュー

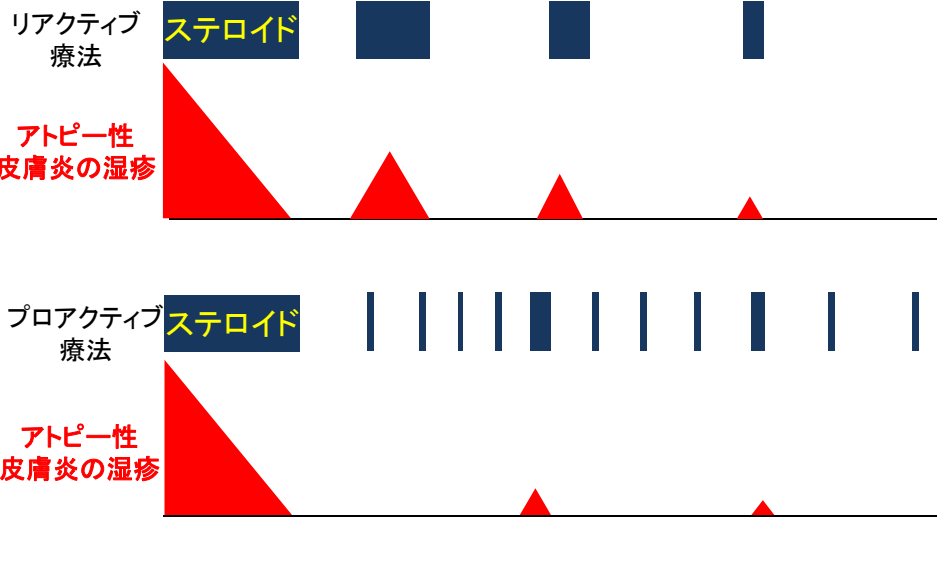
子どもの食物アレルギーやアトピー性皮膚炎は母親が好きなものを食べていたせいではない

本当の予防策は今後のレベルの高い研究成果を待つ必要がある

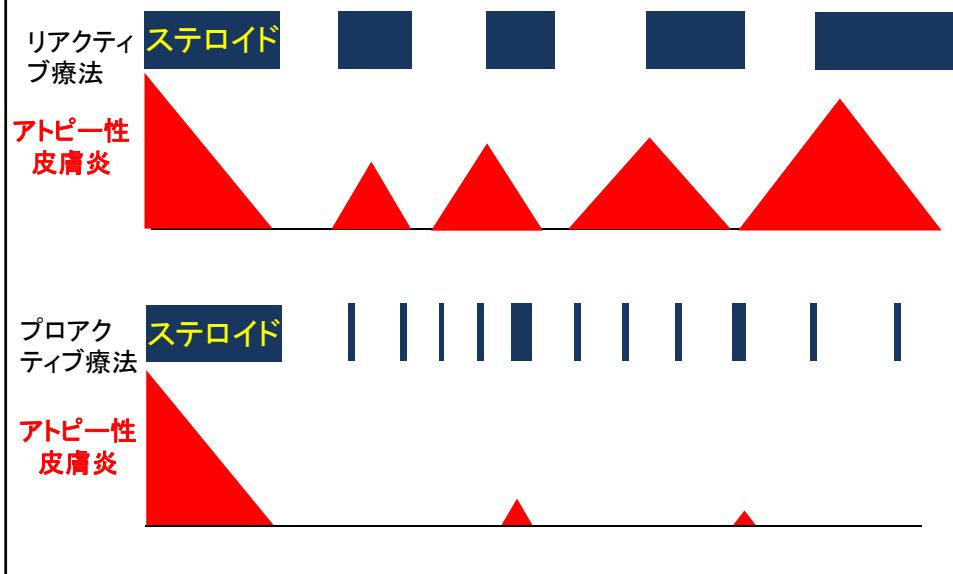
現時点では予防策は不明だが、治療はどうか

重症のアトピー性皮膚炎や食物アレルギーは治せるのか

湿疹が出てから塗るリアクティブ療法と 湿疹が再発する前に予防するプロアクティブ療法



リアクティブ療法による失敗を防ぐために開発した プロアクティブ療法



リアクティブ療法とプロアクティブ療法の予後比較

対象

国立成育医療センターアレルギー科に2004年1月から2006年7月までの約2年半に入院した重症アトピー性皮膚炎の患者

Fukuie T, Nomura I, Horimukai K, Manki A, Masuko I, Futamura M, Narita M, Ohzeki T, Matsumoto K, Saito H, Ohya Y.

Proactive treatment appears to decrease serum immunoglobulin-E levels in patients with severe atopic dermatitis. Br J Dermatol. 2010;163:1127-9.

2年後の成績はプロアクティブ療法の 圧勝

- 明らかに湿疹の再燃は少なく、かつ軽度
- 総IgE値はリアクティブ群の3分の1に減少
- 食物抗原特異的IgE抗体価も有意に低下
- 身長成長速度も若干大きい傾向

ステロイド外用薬できれいになった後も
スキンケアをきちんと続けると再発しに
くくなり、食物アレルギーも早く治る

まとめ

- 子どもの喘息の増加は車社会による大気汚染と関係があるかもしれない
- 環境汚染物質やたばこは遺伝子の働きに影響を与え、アレルギー疾患の発症に関与しているかもしれない
- 20世紀後半からアレルギー疾患はずいぶん増えたが、治療法は確立されており、重症患者は少なくなってきた
- アトピー性皮膚炎は油断せず治療すれば再発も副作用も防ぐことができ、食物アレルギーもより早く治る可能性が高い